
心愛

勿忘草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心愛

【Nコード】

N8415N

【作者名】

勿忘草

【あらすじ】

地元じゃ有名な金持ち学校に通う尾崎奏太。彼の苦手な先輩、小田勇人との学園生活はトラブルがいっぱい。
ホモな先輩とそんな先輩を跳ね返そうとする後輩の物語。

設定&編集前と編集後の違い（前書き）

長い間お休みしていた連載もこれからコツコツ書いていこうと思って以前編集とかやたらしたんでしけど編集前との違いは激しいです。性格とかかなり変わってますね、話も色々変わって前回の事はほとんど忘れても

いi（ry

キャラの見た目は特に決めてないので皆様のご想像にお任せします。

みんな高等部だよ！

設定&編集前と編集後の違い

尾崎奏太

クラスは1-A。小田に対し殴るツツコミを発動させた勇氣ある主人公。

成績は普通。そして帰宅部。

結構アツサリした一面もあるが基本的にネガティブで親友の上浦に愚痴をこぼしていた。

でも自分では前向きな人間だと言っている。最近はやネガティブなところは見なくなってきた。

上浦は半分自分より下だと思っている。きつと隠れDs。

上浦に始めて会ったときから「弄りやすそう」

とか思ってた。

小田が怖い、でも殴った。小田に最近素直になりつつある。

編集前

根っからのネガティブ、でも勇氣はあった。しかもやたらシャイだった。

編集前

ネガティブだけどそこまででもなくなった。若干捻くれた。

小田勇人

2-Aの秀才(べ、別に前は3年だったかもしれないとかじゃないんだからね！)

怖い、最強ジャイアニズム。モデルは作者のリア充兄。

モテるイケメンで少しウザイ。スポーツも万能という完璧人間

なので帰宅部にも関わらず色んな部活から引つ張りダコ。

奏太は俺の嫁。結構キザで尾崎からは怖いと思われると同時にウザがられている。

中村とは攻め仲間ということで仲が良い。

上浦にも少し怖がられている。

編集前

情緒不安定なヤンデレ気味攻め。キザは変わらず

編集後

ウザイ、怖い、ジャ。アンといえば全校生徒が小田だと分ってしまう感じの人間。

上浦柚樹

尾崎と同じ1 - Aで結構頭良い。

登場人物達のボケを鋭く(?)ツッコむ苦勞人受け。

植物が好きで園芸部に入っている。

尾崎に弄られているがそこまで怒らない、一番怒ったのは初等部の時魂込めて書いた習字に尾崎が墨を零してしまった時。

尾崎も悪意はなかった、がその後にはケンカになり3日間無視し合ったが

上浦がとうとう泣いてしまいそこでケンカは終わった。

今でも少し根に持っていたりする。中村に異常な程求愛行動されてる。編集しても特に変化はなかった人。

中村正也

1 - Bの馬鹿。1 - Aに行つては上浦に求愛行動してる。

小田の5倍はウザイ、兄がいるが本人は存在さえも完全否定している。

つまり兄が嫌い。

上浦が好きすぎて半ストーカー気味の様子、1 - Aからは休み時間になると必ず来て大声で上浦に付き合っただけ欲しいとか言っているのでも迷惑がられている。

スポーツは出来る方。

最近の悩みは上浦が素直になつてくれないとか付き合ってくれないとかそんなん。

部活は水泳部。

小田と嫁自慢大会をしている。

丘ノ空学園

金持ち寮学校、制服はキャラの見た目同様特に決めていませんが
白か黒のどちらかの制服を選べます。

ちなみに

尾崎↓黒

小田↓白

上浦↓黒

中村↓白

受け〃黒とか攻め〃白とか

そういう感じに決めたんじゃないんだからね！

今の所男キャラしか出ていませんが女子はいます。

いないと作者が泣きます、花が欲しい。

校舎は3つあって初等部、中等部、高等部に分かれています。

寮はそこから5分ほど歩いた所にあります。（初等部、中等部、高等部に分かれて）

設定&編集前と編集後の違い（後書き）

これからどんどんキャラも出てくるので、
新キャラが出てくるごとにチラッと見ていくほうが話を楽しめると
思います。

暇があつたらまた見に来てくださいね！

塩チヨコレート（前書き）

初投稿に連載小説書いてすみせんww

この話は結構前から頭のなかに入っていたのですが表現しづらいので投稿しようかしまいか悩んだすえに思い切ってやっちゃいましたw
少しでも楽しめていただけるよう、努力します！

塩チヨコレート

どうもこんにちわ！

僕の名前は尾崎奏太おびきかなたです。

あかのそら

丘ノ空学園に通ってます！

僕の通っている学校は下は初等部から上は高等部までの寮学校です。自慢ではないですが、地域では金持ち学校というあだ名が付けられていて一応僕も家が一流企業・・・って言っているのかな自分で・・・

ととりあえずこの学校の高等部1年ですっ！！

結構前向きに生きていている僕ですが
実はちよつと苦手な先輩がいて・・・

「奏太、何してるの？」

「うわぁ！せつ先輩！？」

「ねえねえ何してるの？俺に言えないこと・・・？」

「ちっ違います！ちよつ・・・ちよつと気分転換に花でも見ようかと・

・・・」

「あっじゃあ俺も一緒に行くよ！」

「えっ！？」

「だめ・・・かな？」

「いついや、そんな事ないです・・・」

「じゃあ行こうか！」

「はっはい・・・」

・・・みなさんもうお分かりでしょうがこの人が苦手な先輩、
2年生の小田勇人先輩おたはやくしです。

初等部の時からずっと一緒に幼馴染みたいな人なんですけど
ずっと苦手人物？1の先輩です・・・

よくいじられては遊ばれてます（涙）

ああ、もう嫌だこの人・・・

「あつ見えてきたよ！」

「はぁ、綺麗ですね」

「知ってる？この花。ストックっていう花なんだよ」

「あつ・・・綺麗な色・・・」

「綺麗？俺には君みたいにかわいく見えるよ？」

「なっ・・・」

うひゃぁ・・・よくもまあ男にそんなと言えますねえ。

恥ずかしいっいたらありやしない

てかなんかキザ過ぎやしませんか？

「そっそんな！僕はかわいくなんか無いですっ！！」

「ぶはっ！すっごい赤くなってるよ、かわいい」

「うう・・・」

人のこと馬鹿にしてえ・・・

言い返したいっ

でも出来ないっ

だってこの人うちの大事な取引先の跡取り息子なんですもん・・・
こんな事なら普通の家で普通の生活を送りたかった

「どこがかわいいんですか・・・」

「んー、全部かな？」

「なんですかそれ・・・」

ガンゴーン・・・

天の助け参上。

授業開始五分前のチャイム。
助かったぁ・・・

「あーあ、もうこんな時間か。」

「もう戻らないといけないですよ?」

「じゃあ戻ろうか」

もう会いたくねー。

塩チヨコレート（後書き）

いやはや完全 g d g d ですね w w サーセン w w
とれあえず登場人物が結構増えると思います、
よりひどくなりそうですけど w w

プチトマト（前書き）

授業の終わりに親友上浦と話していると

上浦大好き中村くん登場。そして主人公は先輩と一緒に帰ることに・

・・。

（ちょっと編集しました）

プチトマト

すべての授業が終わり放課後になった、僕は溜まったものを声で吐き出す。

「あー疲れたー」

「お疲れ、山本の野郎超めんどい課題押し付けやがったな」

山本とは数学のお堅い教師です、本日とてもめんどいような課題を出しやがってくれました。

「ホントだよなー、こっちの気も知らないでさー」

「ああ、あの先輩のことだろ？」

「おー、上浦分かってるー」

「当たり前だろ？俺が何年お前の愚痴聞いてると思ってるんだ」

「ザツと9年くらいかな？」

「愚痴を聞く俺の身にもなれよ？」

「あははっごめんごめん」

今僕と会話している彼は上浦柚樹^{かみつらゆずき}。

初等部から一緒に親友（&僕のストレス発散機）です、そして数少ない僕の相談相手。

ちなみにお花大好き園芸部です。

「そーいや今日学園の中庭見たよ」

「おっどうだった？園芸部自慢の中庭は」

「うん、やっぱりいつ見ても綺麗だった」

「だろ！」

「でもまあ先輩と見たから気分は最悪だったけどね・・・」

「・・・お気の毒に。」

そんな今日の出来事に心で涙を浮かべると・・・ん？
あそこで見てるのって・・・

「おーい！柚樹ー！」

「げっ！中村・・・」

「今日こそ俺と恋人になつてくれるよな！？」

「なんねえよっ！！！」

・・・また始まったなー。

「なんでだ！？こんなに愛してるのになんで分かってくれないんだ！？」

「分かつてるぞ！？嫌なくらい分かつてるぞ！！一言で言つと迷惑だ！！！」

「冷たい！でも好きだ！！！」

「きめえ！！！」

このどう見ても上浦大好きくんは中村正也なかむらまさはやくん。

上浦が好きらしくて求愛行動取り巻くってます。

あー、クラスみんな迷惑そうだなー（うざいなー）。

・・・そろそろ教室から追い出すかな？

「ほらほらお二人さん、一旦ここから出てから話そうねー」

鞆を持って二人の背中を押しながら教室から一旦出ます。

「なっなんでだよ！」

「そりゃねー」

「なるほど分かった、あれだな！尾崎くんは俺と柚樹を二人きりの所に連れてってくれ
るんだな！」

「えっ！マジかよ！？」

「ハイハイソウデスヨー」

棒読みで適当に答えとこう、だって別に教室から出てもらえば良かったし、

正直うるさいですからねー。

「やつ・・・嫌だつてえ。こいつと二人きりとか嫌だつてえええええええええええ！」

そのまま適当に人が居ない教室に入れておきましたよ。ちょっとかわいそうんだけどおもしろいからいつか。

-
-
-
-

なんか背後から生理的に受け付けないオーラが……。

「奏太！」

「うわあ！！せつ先輩・・・」

やっぱり・

「今から寮に戻る所？」

「はっはい！」

「だったらさ、一緒に帰ろうよ！」

「えっ あっ はい！」

あ、ヤバイ。

ハイとか言っちゃった・・・。

なんか朝にもこんなかんじなことがあった気がする・・・

プチトマト（後書き）

今回この二人登場させたきっかけただですwwすいませんww
そして出番すくない小田ごめんww

エチケツトキャンディー（前書き）

金持ちが寝るときにジャージ着るの？とか

執事とか居たりしないの？とか

気にしちや駄目ですよ。

仕方ないんです、作者がお金持ちとは御縁がないんですwwww

エチケットキャンデー

・・・何話したらいいかな？

いやっ別に話してないほうが楽なわけなんですけど・・・。
なんか落ち着かないです・・・。

「奏太はさ、好きな人とかいるの？」

「えっ！！」

また追突に何を言っただこの人！？

「いついませんよ！！」

「・・・そっか、うーん。少し安心したような残念なような」
「？」

「まあ、俺以外は見ないでね」

はい？

「それってどういう・・・」

「ほら着いたよ？」

「あっ・・・」

学園とは同じ敷地内にある歩いて5分程の寮に到着。
結局どういう意味？

「ねえ、今日奏太の部屋行くから」

「は？ちょ・・・そんないきなりっ」

「じゃあ後でね」

そのまま先輩は自分の部屋に向かつていった。

てか来る？今日？何時に？・・・何しに？

もし僕が女の子ならば男の人を部屋に入れると

思えば少しくらい如何わしいことをされるのではないかと
思うだろう。

でも僕も愛してるとか言われてるからなー、どうせ冗談だしいつか。
でも先輩がアツチの世界の人だったら？

・・・それはないか、女の人と居るとこ良く見るし。

・・・来ない。

時刻は既に9時半。食事も摂ってますし風呂も入りました。
やっぱりいつものからかい？それとも忘れてる？
でも自分で言ってたし・・・どうなんでしょう？

・・・考えるのも嫌になってきた。というか来ないほうが
助かりますよね？

・・・うん！来ないほうがいいじゃないか！

なんで今まで分からなかったんだろ？

そうとこればテレビでも見ようかなー

ピンポン

・・・来ちゃったよ。

というかなんてタイミング・・・

開け・・・ないとだめですよね。

「はい・・・」

「おじゃましーす」

「どうぞおあがりください・・・」

「ありがとう」

とりあえず先輩にはソファに座ってもらった。

「・・・。」

「にここにこゝゝ」

うう・・・なんでニコニコしながらこつち見るんですかあ・・・。
せめて喋ってくださいって言うかそっぴや何しに来たんだこの人

「あの・・・」

「何？」

「どうして僕の部屋に来たんですか？」

おずおずと質問する僕に先輩はいつものように

「奏太に会いたかったからだよ？」

「・・・」

はあー、普通わざわざ人の部屋に来てもからかいますか？
それにこの人の部屋はここから遠いのになんて暇人なんだこの人。

「あの、またからかってるんですか？」

「からかってなんかいいよ？」

「普通は男にそんなこと言いませんよ・・・」

「『普通』はね。でも俺は違うよ?」

「は、話が会ってないです・・・」

「んー?」

い、胃が痛い

「ねえ、奏太は好きな人いないって言ったよね?」

「はい」

「じゃあ俺のことは嫌い?」

「・・・どうだと思いますか?」

正直言つて嫌いです。

「好きかな?」

「違います!」

「残念だな」

「そ、そもそも先輩はなんでそんなに僕のことを
かわいいとか、会いたいと言うんですか?

先輩カッコイインですから彼女くらい簡単に出来るんじゃない・・・
ですか?」

「・・・」

「・・・?」

「!?!?」

先輩は僕の手を掴みそのまま僕を壁に押し付けてきた。

「な、なにするんですか!？」

ヤバい、もしかして彼女出来ないとかフラれたとかだったのかな・・。

今日が僕の最後の日かもしれない・・。

父さん、母さん、クラスのみんな、ついでに上浦。

今までありがとう・・。みんなが居たから僕は生きていけたよ。

「奏太は本当に鈍いよ、彼女がいないのは奏太が嫉妬しない為。彼女なんて作ろうと思えば朝飯前なんだよ？」

うわ、ナルシスト・・。っていうかそれ言い訳なんですよ実は!!

「でも奏太は攻略難易度が高くて・・。」

「え、あの何言って「だから体に俺の愛を教えるってことにしましたイエー!」

「はあ!??って、ちょ!何服脱がしてるんですか・・!!」

「え、着衣プレイが良かった？」

ジャージのズボンを力尽くで下げようとしている先輩の手を押さえる。

こ、この人ガチだ・・、マジでアッチの世界の人だった!!

てか何サリと着衣プレイとか言ってたんだこの人おおおおおおお!!

グイグイ!!

「ちょ、ホント止めてください!」

グイグイ!!

「せ、先輩！」

グイグイグイ！！

「や、やめ・・・」

グイーーーー！！

「やめんかいボケつつつ！！！！！」

バシィィィン！！！！

「いつ！」

あ、つい関西弁に・・・。

じゃない！！

あまりにしつこいから殴っちゃったよ・・・、

ボケって言っちゃたよ・・・。

どうしよう！！やっぱり今日が僕の最後の日だったんだ！！！！

「あわわわわわ！ごめんなさい！ごめんなさい！ホントすいません

！！！」

「・・・ぶはっ」

笑った！？もしかしてM！？

「あはは！珍しいね、てか初めて？奏太が反抗するなんて」

「え、あのゝ。怒ってないんですか・・・？」

「いや、そんなことないよ？」

やっぱ怒ってるううう

「ただちよつと奏太が俺に自分の意思を見せてるのが嬉しくて」

「え・・・？」

「ほら、奏太って俺にあんまり自分の思ってることとか言わないじやん。」

だから今回も何したって黙ってるかなあって思ってた」

「ちょ！最後の言葉はなんですか！？いい話になるかと思ってたのに！！」

「ちゃんと本音を告げるのが俺クオリティ！！」

「なんのクオリティ！？」

「俺のクオリティ、ということとで続きしょ？」

「何が』ということですか！？続きも何もしません！」

「えー」

「ほらほら、帰ってください」

「じゃあまた明日ね！」

「・・・サヨナラ」

チヨコ（前書き）

バレンタインデーネタです。

急ぎだったので誤字・脱字はスルーしてくださいなw

セリフばかりです、すみません！

キャラ達の居るところは教室です。

チヨコ

「今日バレンタインデーだな」

「そうだねバレンタインデーだね」

「お前チヨコ貰ったか？」

「それは嫌味かな、上浦」

「ちげーよ、ただちよつと気になっただけで・・・」

「そもそも最近の女の子は大体友チヨコだよ、ニユースでやってたよ」

「俺達には無縁な話だよな」

「でも上浦、さっき貰ってたよね」

「あれは渡してって頼まれたんだよ」

「え！誰宛てに！？」

「・・・むら」

「え？」

「中村だよ！！」

「え、ええええええ！？あの中村君に！？あの上浦が好きで好きで仕方ない病の末期患者」

の中村君に！？中村君が上浦激LOVEって知らない人まだいたんだ！！滅んだと思つてた！！！！」

「嫌なこと言うなよ、またストレス溜まるだろうが・・・」

「溜まれ溜まれ」

「お前なああ！！」

「で、誰その子」

「ほら、1-Cの転校生」

「あ、転校生ってあの子のことだったんだー！！転校生だったら知らなくても仕方ないか」

「転校生って知らなかったのかよ」

「いやいや先輩が」

「いやいや中村君が」

「いやいや」

「いやいや」

「中村お前ちよつと黙れ」

「先輩、何やってるんですか」

「僕達はチヨコが欲しいんだよ、チヨコが」

「毎年匂いだけで吐きそうなくらい女の子に貰ってるくせに何言ってるんですか」

「俺はあんまり貰わないぞ？貰っても絶対『二番目でも良いの！』って言われる」

「それ確実に中村君が悪いよね」

「なのに貰ってるお前がスゴイよ」

「俺は柚樹のが欲しいんだ」

「俺は奏太が欲しいんだよ」

「さりげなく変なこと言わないでくださいよー！」

「それに俺達が貴様らにやるチヨコなんぞねーよ」

「貴様『ら』？先輩の俺も貴様呼び・・・？」

「中村、貴様にやるチヨコなんぞねーよ」

「僕も無いですよー、準備してないですから」

「『ならば仕方ない、ベットへ行こう』」

「コラコラコラコラ」

「そついうの止め！！一切禁止！！」

「そつでもしなきゃこの話終わらないぞ？」

「もつと別の終わらせ方しろ」

「でもオチがないですよね・・・」

「よし、キスしよう」

「はあ！？」

「これがチヨコの代わりということだ」

「む、無理です！ねえ、上浦」

「バカ！こつちに話振るなよ！俺までやらなきゃいけないるフラグ立つたる！！」

「振らなくても俺達もやるぞー」

「いやだあああああああああ！！」

「でもこの話はちよつとした話な訳で、本編ガン無視でキスして良いんですか？」

「この小説に本編もクソもないよ」

「だいたい、金持ち校にした訳がわからないよな、たいして金持ちっぽい事してない」

「それ言ったらお仕舞いだからやめろ」

「とりあえずほつぺにしてみらおうか」

「それならギリギリ大丈夫・・・だよな？」

「うーん、それならまだ・・・。」

「はい決定ー」

「じゃ、じゃあせめて場所変えようぜ・・・（さっきから息ピッタリだなこの二人）」

「う、うん。僕もそのほうがまだ・・・」

「じゃあ俺達は裏庭行ってくるね」

「じゃあ俺達中庭で」

「あー、あのっ取り消しってやつば無いか・・・？」

「無し！！」

「ですよー」

く中村×上浦く

「良いか、絶対目閉じろよ？絶対だからな？」

「はいはい」

中村は目は閉じたが顔が笑ってたので余計恥ずかしくなった。

「じゃあやるからな・・・？」

「おーけー」

顔を近づけるだけで心臓は激しく波打った。

顔も熱くて、今にも溶けてしまいそうだ。

ほっぺだけでこんなに苦しいんだ、唇ならばどうなる？

そんな考えが頭の中でちらついて離れない。

恥ずかしい・・・！

「待たせすぎ」

チュ

「え・・・。」

おでこに何かやわらかいものが優しく触れた。
それが何か認識するのは遅くはなかった。

「今、き、きす・・・」

「うん、キスした。」

にっ！っと笑った中村の笑顔は見てたとしてもきゅんってなっ
て・・・。

バタッ

その後の記憶は正直残ってない。

中村に話を聞くと俺は突然倒れたらしい……。

（小田×尾崎）

「早くー」

「うう……」

「早くしてよー」

「待ってください、心の準備というものが……」

この場から逃げたい。

このそわそわした気持ちはきつとそういう感情なんだ、でもここで止めたら一生後悔する。そんな恐怖が頭の端にあるのは何故だろう？

この心臓がバクバクなるのは何故だろう？

「さあ今だ、今がチャンスだ」頭のなかの自分がそう告げていた。黙れ黙れ……！そんなこと思っているわけ無い、だって僕は先輩が……

あれ？僕は先輩のことをどう思っていたんだっけ？

僕は今先輩のことをどう思っているんだ？

「分からない……！」

「……？　どうしたの、奏太。」

「僕、今なにしたいのか分かんないんです。キスしちゃうえば良いんだけど胸がドクドクして・・・、

それはどういうことなのか。逃げたいということなのか？

嫌だってことなのか？それとも……」

「奏太」

「せんぱい。」

「自分の心はどろりとしてる。」

それは
・
・
・
！

ぐっ！

「うわっ！」

チュ

今自分が何をしたのか分からない、

先輩は顔を真っ赤にして口をパクパクさせてなんかかわかった

「か、奏太、今・・・」

「え？」

「キスした……唇に……」

「え、
ええええええええええええええええ！！！！」

その後、僕は部屋から三日間出なかった

チヨコ（後書き）

書いててなんか恥ずかしかったです・・・w

例えて言うなら極太ソーセージ！（お下品注意）（前書き）

お下品です。

歌詞の無断転載っぽいのがあったので
編集しました。

例えて言うなら極太ソーセージ！（お下品注意）

「うう・・・気持ち悪い・・・」

ピピピッ！

体温計が高い機械音を脇に挟まれながら鳴らした。

38.3度かあ・・・。

平日の午後3時、普段なら学校で気だるい午後の授業を行なっているハズだった。

しかし僕は昨日の夜から熱を出し今日は学校を欠席していた。いつもは熱になって面倒な学校を休みたいなんて考えていたが、やりたい事も出来ない、というか動く気にさえなれない。

医者が言うには安静にして薬をちゃんと飲めば時期治るなんて言われたが

正直治る気がしない。いや、まあ治らなきゃ大変なんだけど。

そもそもこの小説の作者は何がしたいんだ何を。

たいして話進んでなくせに主人公が病気で学校休んだとか・・・。僕の経験なら、今にでも先輩か上浦達が来るな。

大人の事情で学校抜け出したーとか言って部屋に勝手に入ってくるお約束が嫌でも見えてくる・・・。

「今のうちにお土産持って来いって上浦にメールするかな」

♪
♪

「コラー！！携帯持ってきた奴誰だー！！」

「ヤベツ」

「上浦お前かー！！罰としてB組の中村に休み時間になったらキスしろ」

「貴様ああ！！それでも教師か！！！！」

「キース！キース！キース！キース！キース！」

「ちょ、キスコール止めるおお！！」

「キスしろー！！」

「キース！キース！」

「キスしなよー！」

「写真撮ってあげるよ」

「じゃあそれ教室に飾ろうぜ！！」

『さんせーい！！』

「お前らああああああああ！！！！！！いつもは尾崎に俺がいじられても知らんぷりしてるくせに何で尾崎が居ないときに限ってそうなんだよっ」

「いや、入りづらい。何故かと言うと尾崎がお前のこと絶妙なタイミングでいじめるから入るタイミング掴めない」

「泣きてえ・・・」

「上浦返信遅いなー、あ！今頃授業中だから当たり前かあ。
先生に怒られてクラスのみんなに弄られてるだろうなー

・・・ぷつ。ヤバい、想像したら笑えて来た。
でもそうなると授業抜け出してこっち来るって事は無いかな」

（10分後）

・・・ちよつと寂しい、上浦来ないみたいだし。
でも、先輩が来てくれるかな・・・？

「ハッ・・・！期待なんてしてない！先輩が来てくれる期待なんて
してない！」

「えーひどいなあ」

「え・・・？」

「そんなに俺が嫌なの？口に出して言うほど？」

「はい！」

「かなたー！お仕置きするよー」

「わーごめんなさいごめんなさい！だから早くその怪しげな物をし
まってください！

っていうかなんで居るんですか」

「先生脅して学校休んだ」

「何してんですかあなた！！部屋にはどうやって入ったんですか！

？」

「管理人に金渡したら合鍵くれた」

「ちょ、そいつクビにして」

「バカ！！あいつクビにしてもし真面目な奴が管理人になったらどうする！？」

「どうもせんよ」

「俺が奏太の部屋に入れないよっ！あ、あと上浦くんクラスの子達に

いじめられてたよ」

「多分原因作つたの僕です」

「ホント君って彼には冷たいよね」

「愛ある冷たさです」

「冷たいのはいいから俺にも愛を頂戴よ」

「冷たいのだけならあげます」

「でも最近俺に冷たくなってきたよね、前まではビクビクしてたのに」

「今だって怖いですよ……。でも今日は熱なんで吹っ切れてます。」

「奏太……」

バサッ

「うわっ」

あれ、先輩の顔が上に

え……僕、押し倒されてる？

「治してあげようか？」

王子様みたいな笑顔、世の乙女達はこのように例えるでしょう……

。

でも僕には悪魔にしか見えない。

「い、いいです結構です帰ってくださいっ」

「汗かけばすぐに熱なんて治るよ、だからあのビクビクしたかわい
い奏太を見せて」

シュル・・・

「ちょ、何さりげにネクタイ取ってんですか」

「やらないか」

「やだやだやだやだやだやだ・・・!」

「えー!先輩たちもうそこまでいったんですかー?俺たちまだそんなとこまで

いってないのにー!」

『え・・・?』

白い制服を翻し、バランス良い体格にカバンと上浦を携え
涼しい顔で僕らの横に立っている中村君のがいた。

それに比べて上浦の顔ったらもう死にそうな顔じゃないか。

黙ってれば良いカップル(男同士だけど)なのにそんな顔じゃ

どう見てもプロの誘拐犯と不幸とともに生きていたのにさらに誘拐
されてもう

死にたい。みたいな被害者じゃないか。

「で、二人はなんでここにいるの・・・?」

「いやぁ柚樹がクラスの人々と一緒に授業中に俺のクラスに来て
抱いてほしいなんていうか」

「俺はそこまで言っていないs」

「なんていうからよしじゃあ先輩たちも含めて4Pってことd」

「言っていないし俺は無理やりみんなに連れて行かれただk」

「ってことで来てみたんだけどお二人が先に始めようとしてるもんだから

びつくりしちゃった」

「行かれたただけであって発言も全て脅されていったのであって別に」

「お願いだからお互いのセリフの潰し合いはやめてくれないかな。何が何だかさっぱり。奏太なんて俺より頭悪いからパニックっちゃって」

「大丈夫です先輩！俺もまったく分かりませんから尾崎くんは一人じゃないです！」

「良かったね奏太！一人じゃないよ！」

「いや、別に嬉しくないですよ・・・」

「それでまだ続けるんならこのあいだ新しく柚樹に買ったおもちゃあるんですけど

中々柚樹が足を開こうとしないから先輩たちに譲ります！」

ヒュッ

パシッ

「ありがとう中村君！ありがたく使わせてもらっよう！お詫びにコレあげるよ！」

このメーカーのゴムめっちゃ薄くて良いから！」

ヒュッ

パシッ

「ありがとうございます！」

「友情を感じている中悪いんですけど、その如何わしいおもちゃのキャッチボールをやるのを止めてください。僕の部屋でそんなものがピョンピョン飛んでるの見たくないんです」

「安心して奏太！今夜は奏太のミルクがびゅくびゅく飛ぶから！」
「柚樹なんて飛びすぎて気絶するくらいキャッチボールしてあげるからな！」

「「逃げるぞ！！」」

ビュンッ

ガシッ

「ダメじゃないか奏太」。病人が全速力でドアに向かって走ろうなんて。」

「お前もだぞ柚樹」。人の部屋の窓から飛び降りようなんて危険だろ？」

「離して下さい！！僕に処女卒業なんて必要ないんです！！」

「俺も飛び降りる危険よりお前とのキャッチボールのほうが怖えんだよ！！」

てかそれどう考えてもキャッチボールじゃないだろ！？ゴールにシュートを

打つサッカーだろ！？」

「きゃ／＼奏太ったらそんな下品な言葉覚えちゃって」

「そんな下品なギャグ必要ないぞ」

「うるせえ！！お前らの会話ほうが下品だ！！！！」

・・・そんなこんなで僕&上浦VS先輩&中村君の僕らの処女を掛けた戦いは

数学教師の山本が先輩たちを連れ戻しに来た事により幕を下ろした。僕の熱はその戦いにより汗をたくさん流したおかげで次の日には完全に復活し、

学校に行けるようになった。

山本のおかげで3人はこっぴどく怒られたようでもうこなかったけどメールは山程来た。

先輩の加工した僕の処女卒業写真が添付されたメール・・・。

中村君の加工された上浦の「処女卒業しました！！」とでかか文字が書かれた

処女卒業写真が添付されたメール・・・。

上浦のと容量いっぱいまで『その写真を削除しろ』と打ちこんであった

メール・・・。（ちなみに僕の写真は削除して上浦のはまだ保存してある。）

僕は3人のメアドを削除した・・・。

例えて言うなら極太ソーセージ！（お下品注意）（後書き）

お下品です。

ええ、2回言いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8415n/>

心愛

2011年10月7日23時16分発行